

牧師室から（2020年4月12日）

教会の前を出ると、青空が広がり清明な風が気持ちいい。目に入る緑や家々の前を飾っている小さな花たちもそれぞれの香りで競っているよう。4月の日差しには優しさを感じる。

しかし、「新型コロナウイルスの感染予防の為、礼拝・集会を休止しております」という看板を前にして心が痛む。

9年前に宮城県石巻から大阪に転任する時も、地震、津波で苦しい思いをした。すべてが崩れ落ちたような衝撃だった。しかし、瓦礫や救援物資の傍らで、互いに手を握って祈りながら励まし合った。そして、主日の礼拝には涙を流しながら大きな声で讃美歌を歌った。

今度のコロナの影響は、私たちに共に祈り、共に歌う喜びさえ、奪おうとしている。ハグでもしたくなる出会いにも、離れて笑うだけである。いや、会うことさえできない。見えないコロナは私たちの絆を脅かしている。

しかし、見えなくても見えるものがある。聞こえなくても聞こえる声がある。はっきり感じられる確かなものがあるのだ。

十字架の上で私たちのために血を流し、また私たちのために復活なされた主イエス・キリストの愛と恵みである。その愛に捕えられた使徒パウロは言う。「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ローマ8・38, 39）」

今こそ、私たちをしっかりと握っておられる主のみ手に全てを委ねて耐え忍ぼう。独り子をお与えになった神の愛はすべてに打ち勝つ、私たちの避け所、力であるから。

（鈴木善姫牧師）